

# ベートーヴェンの生涯引っ越し回数は79回 北斎は93回

日本人に人気の楽聖と呼ばれるベートーヴェンは引っ越し魔だった。22歳を目前にボンからウィーンに移り住んで以来、56歳で亡くなるまでの間にたびたび引っ越しを繰り返し、その回数は79回とも言われている。作曲の盗作を恐れての引っ越しと言うが……賃借人としてお行儀が良くなくわがままで近隣の人とうまくいってなかったということが書き残されている。



ベートーヴェンは9曲の偉大な交響曲、7曲の協奏曲(5曲がピアノ協奏曲)、32曲のピアノ・ソナタ、17曲の弦楽四重奏曲、10曲のバイオリン・ソナタ、5曲のチェロ・ソナタ、2曲のミサ曲、オペラ「フィデリオ」、その他、138曲もの作品を生み出した巨人(タイタン)。

当時のウィーンではベートーヴェンが変わり者であることを知らない者はいなかったが、それでも他のどんな作曲家よりも敬愛されており、それは盛大な葬式と多数の参列者を描いた書画からも伺える。

若いころハイドンを先生として作曲を学んだ。師ハイドンに、楽譜に「ハイドンの教え子」と書くよう命じられた時は、「私は確かにあなたの生徒だったが、教えられたことは何もない」と突っぱねた、とも言う。

またテプリツェでゲーテと共に散歩をしていて、オーストリア皇后・大公の一行と遭遇した際も、ゲーテが脱帽・最敬礼をもって一行を見送ったのに対し、ベートーヴェンは昂然(こうぜん)として頭を上げ行列を横切り、大公らの挨拶を受けたという。後にゲーテは「その才能には驚くほかないが、残念なことに不羈(ふき)奔放な人柄だ」とベートーヴェンを評している。

トラブルがあった、ライフサイクルが変わった…など、引っ越しをする理由というのは様々です。

しかし引っ越しというのは、そんな頻繁に体験できるものではありません。特に日本人は、あまり引っ越しをしない種族とも言われています。

では日本人は、生涯において何度引っ越しをするのでしょうか？

なんと日本人が生涯において引っ越しをする回数は、4~6回しかないと言われています。これは平均的なものなので、もちろん個人によって差はあるでしょう。

しかし引っ越しする回数が4~6回というのは、とっても少ないと思いませんか？アメリカ人の生涯の引っ越し回数は、15~17回だそうです。となると、アメリカ人は日本人よりも約3倍以上も引っ越しをしているのです。こうやって比較すると、どれだけ日本人の引っ越し回数が少ないか分かりますよね。

また、かの有名なベートーヴェンは、人生で79回も引っ越しをしていたそうです。創作活動をするために、平均1年に2回も引っ越しをしていたんだとか。

日本の誇る世界の画家・葛飾北斎は、生涯に2度結婚しており、それぞれの妻との間に一男二女を儲けている(合わせると二男四女)。北斎は酒を飲まず、煙草も吸わなかった。画工料は通常の倍(金一分)を得ていたが、赤貧で衣服にも不自由。金銭に無頓着だった。

北斎は、行儀作法を好まなかった。たいへんそっけない返事をし、態度をとる人物であった。人に会っても一礼もしたことがなく、ただ「こんにちは」「いや」とだけこたえ、一般的な時候・健康について長話をしなかったという。また訪問した人の証言では「北斎は汚れた衣服で机に向かい、近くに食べ物の包みが散らかしてある。娘そのゴミの中に座って絵を描いていた」という。

93回に上るとされる転居の多さもまた有名です。一日に3回引っ越したこともあるという。75歳の時には既に56回に達していたらしい。当時の人名録『広益諸家人名録』の付録では天保7・13年版ともに「居所不定」と記されており、これは住所を欠いた一名を除くと473名中北斎ただ一人である。

北斎が転居を繰り返したのは、彼自身と、離縁して父・北斎のもとにあった出戻り娘のお栄(葛飾応為)とが、絵を描くことのみ集中し、部屋が荒れたり汚れたりするたびに引っ越していたからである。

また、北斎は生涯百回引っ越すことを目標とした百庵という人物に倣い、自分も百回引っ越してから死にたいと言ったという説もある。ただし、北斎の93回は極端にしても江戸の庶民は頻りに引越したらしく、鎭木清方は『紫陽花舎随筆』において、自分の母を例に出し自分も30回以上引越したと、東京人の引越し好きを回想している。

北斎は最終的に、93回目の引っ越しで以前暮らしていた借家に入居した際、部屋が引き払ったときとやら変わらなかつたままであったため、これを境に転居生活はやめにしたとのことである。

北斎は料理は買ってきたり、もらったりして自分では作らなかった。居酒屋のとなりに住んだときは、3食とも店から出前させていた。だから家に食器一つなく、器に移し替えることもない。包装の竹皮や箱のまま食べては、ゴミをそのまま放置した。土瓶と茶碗2,3はもっていたが、自分で茶を入れない。一般に入れるべきとされた、女性である娘のお栄(葛飾応為)も入れない。客があると隣の小僧を呼び出し、土瓶を渡して「茶」とだけいい、小僧に入れて客に出した。

ここまで乱れた生活を送りながらも彼が長命だった理由として、彼がクワイを毎日食べていたから、と言う説がある。

斎藤月岑によれば、この親子(北斎とお栄)は生魚をもらうと調理が面倒なため他者にあげてしまう、という。